

Y994

J6576

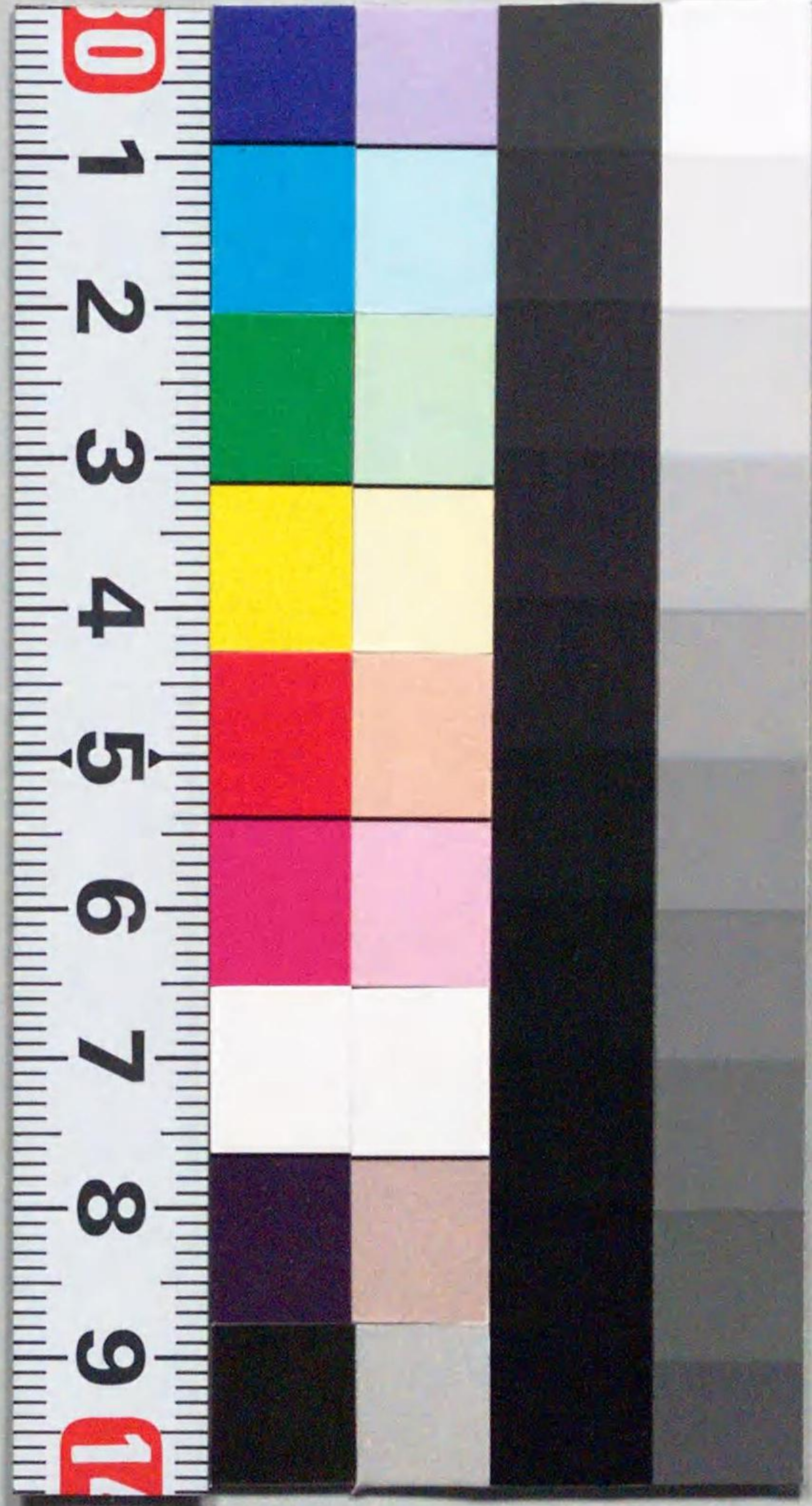
戦争と道義



自序

小泉信三

小泉信三



4994
J6576

目次

戦争と道義 一

不屈不敵の精神 三

決心第一 智術第二 一七

武器としての藝術 二九

對米放送に擬す 三

アジャは青年に期待する 三五

戦争と道義

戦時に於ける一切の道義は戦争に對する確信と希望とから發する。これがなければ道義は必ず地に墮ちる。如何なる説教もこれを防ぎ止めることは出來ない。しかしその確信と希望とは、幼兒が匙で物を哺ませられるやうに、一時の氣休めなどによつて他から興へらるべきものではない。剛強なる國民のそれは何處までも戦局の現實を直視した國民自身の覺悟から發しなければならぬ。米内海軍大臣は去る議會において率直に本年初頭以來戦況の大局は不振の現状にあると言明せられ、このことが不思議にも却つて國民に一種の満足を與へ、士

戦争と道義

一



I 種
W



1200800664199

氣を奮ひ立たせる効果があつたのである。

言ふまでもないが、この戦争に中途半端な解決はあり得ない。吾々はこれを覺悟しなければならぬ。米英人は頻りに日本の絶滅を唱へてゐる。幾分の威嚇はあるかも知れぬが、私はそれを眞に受ける。地を替へれば、私も必ず同じ事を唱へるであらう。アメリカが今のアメリカである限り、彼と我とは兩立しない。アジヤはアメリカ人のアジヤだと思つてゐる以上、彼等にとつて日本の存立は許して置けぬ筈である。筆にするのも不祥ながら、萬一この戦に負けたり三等國、四等國になる、ならぬの如きは問題でない。日本が果して地球上に國として残るか、否かが問題である。

妥協的終末なし

現に最近米國で盛んに行はれ、日本でも翻刻によつて一部の人に讀まれてゐ

る地政學者スバイクマンの著「アメリカの世界政策戦略」の終りに近く、戦後の東亞政策を論じた一節には、戦後アジヤに國として残る國々を數へてロシア、支那さうして多分日本と書いてゐる。スバイクマンは空理に耽らぬ、極めて現實的なる著者である。その現實的なる著者が斯く一個の疑問として日本の存續を記すこの一事を以て米人一般の意圖及び空氣を察しなければならぬ。私は僅にアメリカの出版物の一小局部に注意してゐた一人に過ぎない。アメリカを知ること精しき人々の見るところは遙かに深刻なものであらう。

勝つか亡びるか、何れかである。中間の途はない。既に中間の途はないときまれば、話はハッキリする。この大戦に妥協的な終末はあり得ない。こちらがそれを望む望まないではない。假りに望んだとしても、敵はそれを承知しないのである。かうなれば話は却つて分り易い。戦ふ以外に打つ手は全くないのである。戦つて勝つか、怖ぢ恐れて亡びるか。迷ふこともたゆたふこともない。

汗血死闘、ただこれのみであり、此一事によつて必ず途は開かれる。

戦争は敵より後まで頑張り通すものが勝つ。誰も承知の筈でありながら、多くの者が肝心の時にこれを忘れ、みす／＼勝てる戦ひを自ら進んで放棄して負ける。勝兵は勝つて而して後戦ふと兵家は教へるが、敗兵は未だ敗れざるに既に敗れる。東西古今の戦史はその無数の實例に満ちてゐる。智謀も術策も無論戦争に必要である。併し、國家存亡の危機を救ふものは、智慧や才覚ではない。たゞ覺悟と決意とである。度胸がきまれば奇策妙案は數限りなく湧いて來る。たゞ一つの決意がなければ、國民はたゞ小智慧、小才覺の氾濫に浮いてたゞよふのみであらう。

佛ソの對照に學べ

四年前ドイツ軍のフランスに侵入してパリに迫るといふを聞くやフランス人

は倉皇失色して右往左往し、避難民は道路に溢れて、軍隊の行動も自由ならず、政府は脆くも情なくも降伏して、嘗てナポレオンを持ち、クレマンソオを保持した歴史は一朝にして泥土に委せられた。

三年前、レニングラードはドイツ軍に圍まれ、彈盡き食盡き、數千人の餓死者を出して屈せず、遂にドイツ軍は圍みを解いて退いた。ドイツ軍の銃砲爆弾も飢餓も寒氣も、遂にレニングラードの露軍と露民とを屈せしめることが出来なかつたのである。

人間は二三日食はずとも死ぬものではない。その人間が數千人餓死したといふのである。人間は一回の雑炊のために喧嘩口論することも、隣家の庭の南瓜を盗んで殴り合ふことも、しようと思へば出来る。同時に數千人が餓死しても屈しないで郷土を護りおほせることも、しようと思へば出来る。これが吾々の前に置かれた選擇である。

人間一人が一日生きて行くためには何千カロリイとかの熱量を要する。それだけの食物が得られなければ飢ゑる。飢ゑて幾日か続けば死ぬ。これは生理學の教へるところで動かすことは出来ぬ。だから食物がなければ何も出来ぬ。無論戦争は出来ぬ。食物不足と見たら早く手を上げよう。これも一つの考へ方かも知れぬ。爆薬に点火すればガスが発生する。ガスが発生すれば物を吹き飛ばす。人間も飛び家屋も飛び戦車銃砲も飛ぶ。これは化學的物理学現象である。爆弾は飛行機から落ちて来る。その飛行機の少い方は多い方に敵はない。戦つても無駄だ。降参しよう。これも一つの考へ方であらう。前記のフランス人はその代表的なる見本である。さうして降伏して何うしたかと言ふと、戦つて死ぬより遙かに酷い恥辱と苦痛の無間地獄に陥つた。

パリ市民とレニングラード市民との差違を説明するものは、生理學でも、物理學でも、化學でもない、それは全く人間の力である。降伏したいと思ふ者に

は一日の絶食も立派に降伏の理由になる。不屈の兵と國民とには數千人の餓死も理由にはならぬ。

攻防轉機必ず到る

日本は今籠城に似た状態にある。精銳無敵の帝國陸海軍儼としてありといふと雖も、飛行機を始め各種兵器にも不足のこと多く、食糧も決して有り餘つてはをらぬ。然らば、どうするか。どうするもない。たゞ戦へばよいのである。智謀や計略はあとのことである。吾々はたゞ戦ふのである。手近のところではレニングラード、廿數年前にはクレマンソオ政権下のフランス國民が、新しい前例を示してゐる。敵軍重圍の下に屈せず動かず、いくら攻めても圍んでもその甲斐がないとなつた時に、必ず攻撃者の息の續かなくなる機會が来る。これが攻防の轉機である。その時、我は猛然として鷲鳥の搏つが如くに搏たなければ

ならぬ。また必ず搏つであらう。さうして迅雷耳を蔽ふに違あらしめず、敵に致命の打撃を與へなければならぬ。その日は何時来るか。それは一には敵の作戦如何により、一には我が軍と國民との物心兩面における準備如何に係るであらう。併し、その日は必ず来る。その日のために、吾々は有らゆる力を盡し有らゆることに耐へなければならぬ。

如何に防備を嚴にしても、敵の空襲を百分百防ぐといふことは到底出来ない。敵機が来れば爆弾を落すであらう。落ちれば音がして物が壊はれ、人も死ぬだらう。食物も局部的には不足するかも知れぬ。レニングラードでは數千人餓死したといふが、日本でも多少は死ぬかも知れぬ。結構だ、とはいひかねるが、人の死なない戦争といふものはない。當り前ではないか。たゞ何處までも忘るべからざるは、前線も銃後も戦闘だといふことである。従つて例へば敵機來襲の警報の如きも、それは單に警戒を與へるだけでなく、それよりも更に凜

然として國民を戦闘に奮ひ立たせるものであつて欲しい。勿論一般國民は直接武器を以て敵機と闘ふ譯ではない。吾々は或は土囊に隠れ、或は退避壕に潜むであらう。しかし吾々の衷心の願ひはどこまでも退避でなくて戦闘でなければならぬ。士氣は安全に依つて振はずして戦闘に依つて昂められる。

警報に戦闘喇叭

その點で私は、彼の警報は、多少とも號叫悲鳴に類するサイレンなどの代りに（或はそれと共に）ラウドスピーカによる對空戦闘ラッパ又は勇壯なる軍樂を以てしては如何かと思ふ。同時に敵機の殲滅または撃退せられた時は敵機撃攘曲の如きものを豫め用意して吹奏するのも愉快ではないか。さうして幾度か戦闘ラッパをささし、幾度か撃攘曲をささしつゝ最後の勝利の日に至るといふことになつたものである。事兒戯に類する如くであるが、士氣の振作上必ずしも

無用ではなからうと思ふ。苟も武を尙ぶ日本國民としてよしや不運にして爆風に飛び、焼夷弾に焼かれる等の事があつても吾々は軍樂の聲戦闘ラッパの響きの中にこそ斯くあらんことを希ふものである。

人はよく敵の物量といふ。物量は無論重大である。併し最も大切なることは彼我の物量を正しく評價し、適時適所にこれを集中することであらう。この集中が適切に行はれ、加ふるに地の利、人の和をもつてするならば、懸軍萬里の大軍を破ることは決して難事でない。反對にこれが不適切であれば百萬の大軍も容易く數萬の兵に敗衄する。サラミス海戦におけるギリシャの勝利、曹操赤壁の大敗以來その實例は數へるに違がない。既に米内海軍大臣も、寡をもつて衆を破るは日本兵法の妙義であつて、帝國海軍年來の苦心もまたこの點にあつたと申された。これ正に國民の海相其人の口から聞かんと欲して待つてゐた一言であつて、このたゞ一つの確信希望のあるところ、われ等また何をか爲さず、

何をか忍ばざらん。願くはわが陸海軍、國民の信頼を信頼して願慮するところなき大膽果斷の處置に出でんことを。

この確信と希望のあるところ國民道義の昂上も必ず期して待つべきである。

(昭和十九年九月廿五日毎日新聞所載)

不屈不敵の精神

戦争は敵より後まで我慢する者が勝つ。この事は理論としては誰も承知してゐる。それでゐて實際に當つては大概の場合に忘却する。さうして負けてゐない戦を自分で投げて負けることが多い。

實例を第一次世界大戦に取る。英佛は勝ち、獨逸は負けた。しかし、今その四年餘りの経過を辿つて見ると、絶望の聲は獨逸の側でも英佛の側でも、途中幾度びか發せられた。當時それ〴〵の交戦國民は自分の苦痛だけしか分らないから、苦しんでゐるのは自分の國ばかりだと感じたものが多い。しかし、今正

確な記録を見れば交戦國の一方に絶望者があつたとき、他方にもまたそれがあつた。ドイツの最高當局者には開戦直後からすでに悲觀者があつた。英國でも、フランスでも同様である。殊にフランスの軍隊は一度は崩潰の一步手前に立つまでになつた。一九一七年春、これより先きジョッフルに代つて總司令官となりたるニイエル將軍の攻撃企圖が失敗に終るや、佛軍兵士の士氣は極度に頽廢し、統帥者は無用に人命を損するものであるとして黨を結んで上官に反抗するものを出すこと十數軍團に及び、パリ市中、兵士が士官に敬禮しないと云ふ有様にまで立ち至つたとのことである(四手井陸軍少將著「戦争史概観」參照)。その後を受けて新に首相となつたものがクレマンソーであつた。彼はその猛虎と綽名せられた闘志を以て七十六歳の老軀を提げて起ち「戦勝は最後の十五分を克く忍ぶ者に來る」と喝破し、一九一八年の春、ドイツ軍大攻勢の前にパリのまさに殆ふからんとするや、議員の間に答へて「予はパリの前面に於て

戦ふ。パリの中に於て戦ふ。パリの背後に於て戦ふ」と怒號して國民を奮起せしめ、ペタン、フォッシュと力を協せて終に狂瀾を既倒に回すことを成し遂げた。

當時の事を回想すれば。詢に國は一人を以て興り一人を以て亡ぶの言空しからず、一木大厦を支へ難しといふが如きは、たゞこれ怠け者、臆病者の遁辭に過ぎざるの觀がある。いはんや百木を以て一屋を支ふるにおいてをや。

しかし今クレマンソを論ずるのが目的ではない。こゝにはたゞ、窮極の窮極において戦を放棄せざる者が常に戦勝者であることをいひたいに外ならぬ。さうして當時における佛國民の奮起は最も顯著なるその實證である。

しからば國民は如何にして窮極の窮極においてよく忍ぶか。それには強靱なる神経を持たなければならぬ。しかし、如何なる強靱の神経と雖も不斷の無制限なる緊張には疲勞せざるを得ぬ。そこで爲政者も國民とともに意を用ゐて神

經の緩養を圖らなければならぬ。もちろん緩養はそれ自體のためではない。それはやがて幾たびとなく反復せらるべき極度の緊張によく堪へ得しめんがためである。今我陸海の將兵は、多くの戦線に於いて飲まず食はず、眠らずに戦つてゐる。その時に當り國內の我々がよく眠り快く笑ふとあつては相濟まぬといふかも知れぬ。それは私にも同感できる。しかしよく思はなければならぬ。我々が我將兵に報ずる途は前線に十分の物を送り、銃後に磐石不動の精神力を示して彼等をして後顧の憂ひなからしめることが第一である。決して心配して瘦せて疲れて、神経質になることがそれではない。子が父母の病を憂へるのは當然である。しかし憂苦のあまり自分も患ひ、親子枕を並べて病床に臥すがごときは決して孝行の途ではない。子たるものは何處までも健康で快活で、親を勵まし、百方治療の術を盡して病を退治しなければならぬ。これが眞實の孝子といふものであらう。人民報國の途もまた然り。戦局を憂ふる心は人も吾れも變

りはないが、然し心配だからといつてたゞその事にのみに屈託し、また人を屈託せしめ、朝も晝も夕も夜も絶えず熊の膽を嘗めたるが如く、道に紙入れを遣したるが如き表情のみを續けてゐることは、決して勝利の大道を歩む所以ではない。時の許す限りはよく眠り、苦難の中にも樂事を求め自らよく笑ひ、またよく人を笑はしめ、困難にも危険にも己れ自身を消磨し盡さぬこと、茲に最後の十五分を克く忍ばしむる祕密がある。笑はぬものは眞剣で、笑ふものは不眞面目だと、四則算術のやうな考へ方をしてはならぬ。難局に處しての剛強なる國民の笑ひには不屈不敵の精神のその裏に潜んでゐることを知らねばならぬ。

敵の爆弾は周章狼狽して逃げ迷ふものゝ上にも落ち、度胸をきめて鼻唄歌つてゐるものゝ上にも落ちる。どちらが米英人の爲に都合が宜しいか。吾々としては彼等に都合のよくない方を擇ぶのが義務であらう。

(昭和十九年八月廿日朝日新聞所載)

決心第一 智術第二

如何にして米英を撃滅すべきか。それは明白で平凡である。たゞ戦ふといふことだ。勝つ日まで戦ふといふこと、たゞこれのみである。

智慧才覺は役に立たぬ許りか、或は却て邪魔になる。これ程の大戦争に何か奇抜な妙策があるかのやうに思ふこと、それが抑々の間違である。汗血塗炭、惡戦苦闘、これ以外に勝利の途はなく、たゞ此中に勝利の途は必ず開ける。ど

んな新兵器があるか、どんな秘密の作戦計畫があるか。そんな事は凡べて軍當局者に一任して置けば好い。吾々國民は戦ふことあるのみ。籠城の場合を想へ。城は敵軍によつて十重二十重に圍まれて、假りに食糧も彈藥も充分ではなかつたとする。そんな場合にどんな智慧や才覺が役に立つといふのか。殊に第一線に於て身を以て戦ふべき將兵が、餘計な頭を使つてそれが何の役に立つか。今、我國は圍まれた城の如きもので、國民は之を護る將兵である。策や術に頼つてはならぬ。敵を屈せしむるものはたゞ我が不屈の意志のみである。いくら圍んでも攻めても甲斐がないとなれば、茲に戦鬪の轉機が来る。さうしてそれは必ず来る。

戦争は敵より後まで我慢する者が勝つ。誰れも此事を承知してゐる。しかも實戦に臨んでは屢々之を忘れ、見す／＼勝てる戦争を自分から投げて負ける者が多い。兵家に、勝兵は勝つて而して後戦ふといふ言葉がある。それを振つて

私は言ひたい。敗兵は未だ敗れずして既に敗ると。古今の戦史はその無数の實例を示してゐる。前大戦の歴史も其實例を示してゐる。鬪志は妙策からは生じない。妙策は鬪志から限り無く湧いて来る。さうして其妙策なるものは、後に至つて顧みれば最も平凡明白なものであるのが常である。

前大戦の第五年、一九一八年の春、ドイツ最後の大攻勢の前にパリの正に殆ふからんとするや、フランスの老首相クレマンソーは議會に於て、「予はパリの前面に於て戦ふ、予はパリに於て戦ふ、予はパリの背後に於て戦ふ」と怒號して政府の決意を示し、遂に狂瀾を既倒に回すことを成し遂げた。

その二月許り前の事である。同じクレマンソーは矢張り議會で社會黨員の質問に答へていつた。予の政策は簡明である。諸君内政政策を問ふか。答へて曰く、予は戦争を行ふと。外政を問ふか。答へて曰く、予は戦争を行ふと。今やロシアは吾等を裏切つた。予はいふ、予は依然戦争を行ふと。憐むべきルウマ

ニヤはドイツに屈伏した。予はいふ、予は依然戦争を行ふと。然り予は最後の十五分に至るも斷乎として戦争を行ふと。さうして彼れは有らゆる不利なる條件の下に戦ひ續け、遂に敵國の屈服に至つて始めて已んだ。西洋人でも中々話せる。クレマンソオの言は我意を得た。正に吾等の言はんと欲するところを言つてゐる。此の時フランスを救つたものは策でも術でも何でもない。たゞ不屈の意志、これのみであつた。

「……………」

堅き心の一徹は

石に矢の立つためしあり、

石に立つ矢のためしあり、

などて恐るゝことやある、

などてたゆたふことやある。」

小學兒童が無心に歌ふ軍歌の詞を、今こそ吾々が身を以て行ふべき秋ではな
るか。

二

それにつけても私は、我官民が餘りに心身を勞して早く疲れることなきを祈る。敢て心身を勞するな、と謂ふのではない。決して疲れるなと謂ひたいのである。如何なる強靱の神経と雖も、間斷なき無限の緊張には堪へ得らるゝものではない。茲に於て爲政者國民相共に常に意を用ゐて神経の緩養を圖らなければならぬ。勿論神経の緩養は其自體の爲めではない。それはやがて來るべき極度の緊張によく堪へ得しめんが爲めである。戦局を憂ふる心は人も吾れも變りはない。併し心配だからと言つて朝夕その事にのみ屈託し、凡ての事物に其暗黒面を求め、未だ來らざる災厄を幾倍かに擴大して豫想し、朝は乗り物の雜沓

を歎じ、晝は雑炊の少量を憤り、夜は敵機の來襲と否とに拘らず夜毎に爆弾焼夷彈の落下を恐れ、不美不景氣なる表情と泣き言を隣人に傳へて他人をまでも不愉快ならしむる如きは、これがイタリヤ人かルウマニヤ人ならいざ知らず、決して戦勝國民たるべき日本人にふさはしい態度とは思はれぬ。勿論食膳は豊かであるに越したことはなく、空襲も無い方が有るよりたしかに好い。しかし一たびそれが必然不可避の事となつたら、之に處するの途も自から明かであるべきだ。既に外でも書いた通り、敵の爆弾は狼狽して逃げ迷ふ者の上にも落ち、度胸をきめて鼻唄歌つてゐる者の上にも落ちる。米英人はどちらを好むか。同じことなら我々として當然彼等の好まぬことを爲すべきではないか。

米英人は日本人の絶滅を唱へてゐる。これは威嚇もあらうけれども、亦確かに本音でもある。金甌無缺の日本は興るか亡びるか。その何れかである。中間の途はない。すでに中間の途はないとあれば話はハッキリする。話がハッキリすれば、定めるなど言つても度胸は定まる。度胸がきまれば、騒ぐことも疲れることも無い筈である。そこで始めて戦争が眞實に全國民の戦争になるであらう。

すでに覺悟が定まれば戦争も自からやりやうがあると思ふ。専門の軍事は姑らく措き、一國民としての心持を言へば、私はあまり一々の出來事に感情を動かさぬが好いと思ふ。アツツもサイバンも口惜しいことであつた。しかし今はそれを言つてゐる時ではない。玉碎勇士の忠魂を慰める途はたゞ戦争に勝つ外にはない。戦争にも勝たずに英靈に報するなどは以ての外で、到底吾々の口から言へた義理ではない。極言すれば、讀經も供養も演説も今はすべて不要である。これ等のものは凡べて戦争が勝つてから後の事である。英靈が待つて居られるものは唯一つである。その唯一つのものを手向けずに、外の事許りしてゐるのは、寧ろ相濟まない事ではないか。吾々が靜かに彼等の忠勳を思ひ、聲

を放つて彼等の忠死を哭げき得るのは、最後の戦利の確定した其日の事である。其日の来るまで吾々の英霊に向つて告げ得ることはたゞ「待つて、下さる」の一語の外には無い筈である。其の日の来るまで吾々に歎げき悲しむ資格はない。鐵心石腸たゞ戦ふのみである。

三

其意味で私は「海ゆかば」の演奏も場合を制限し、餘り屢々しないことをいそかに望んでゐる。信時潔氏の彼の作は古今の名曲として永く日本國民に依つて歌はるべきものと思ふ。私も彼の曲を聽いて忠死の人々を思ひ肅然として心を正したことも幾度といふを知らぬ。しかし、餘りにも悲壯痛恨の事多き現在は、其演奏を制限し、寧ろ勇壯豪快なる戦闘曲を以て人心を鼓舞する方が一層大切ではなからうか。姑らく昨日の死者を忘れて明日の戦闘を思へ。戦勝の其

夕べに靜かに死者を哀しまん。これが我々の眞實の衷情ではなからうか。其故に私は、寧ろ痛快なる捷報の傳へらるゝ機會にこそ戦死者を思ひ、水漬く屍草むす屍の譽れを讃へるべきで、手向けて聽かしめるべき戦果もなく、徒らに死者を哭げくは生存者の責任として心苦しいと思ふのである。

勿論これは私の主觀的なる感想で、敢て他人に強ゆべきではない。たゞ私はくり返して言ふ。米英撃滅の途は術でも策でもなく、たゞ戦ふの一事の外にない。戦ふには豪快の精神を以てしなければならぬ。豪快の精神を盛んにするには、屈託してはならぬ。よく眠り、よく笑ひ、夜はいかに暗黒でも朝は必ず來ることを忘れてはならぬ。やがて敵機も來襲するであらう、來襲すれば撃退するのみだ。格別の事はない。戦争は運動競技ではない。規則もなければ審判もない。一回空襲すれば何點で、何十點獲得すれば勝ち負けと、そんな氣樂な仕事ではない。その代りもつと遙かに簡單である。戦争は最後まで屈しないもの

が勝つ。たゞ其丈けである。さうして届するか届せぬかはたゞ人に在る。勿論物量と機械とは大切である。しかし敵味方の物量を如何に精確に計測するかといふことと共に、如何に適度に之を重視するかは常に人に在ることを忘れてはならぬ。

明治三十八年五月、日本海に來襲したバルチック艦隊と之を邀撃する我聯合艦隊の物的勢力とは冷厳なる事實として數字に依つて明かであつた。しかし彼私の對抗上如何なる程度に此の敵勢力を重視するかは人に依つて同じくない。之を聞きおぢするものと東郷司令長官とは、たしかに違つてゐたのである。歴史上の大事件も後に至つて其経過を顧れば、一々の因果の連鎖と個々の連鎖の選擇とは、白日の如く明瞭で、動かすべからざる當然必然の支配を受けたやうに見える。しかし事前に於て前途を望めば、無數の疑問の集塊は混沌として濃霧の如く視界を遮ざる。此混沌の中を洞察し結果として起るべき事實に確信を

抱き、決然として當惑なき一斷を下すこと、これが吾々の名將に期待するところであり、東郷大將の場合は正に其隨一に當る。前記のクレマンソオの如きは、其身軍人ではないけれども、正に他の一例を示すものと謂ふことが出来る。物量はいかにも大切である。しかし敵の物量々々と、開戦前から分り切つてゐたことを、今更珍しさうに言つてそれが何になると言ふのか。それ等は凡べて承知の上の戦ひではないか。

多事であつた夏は過ぎ、秋風は都門を訪れた。銃後の労働はいよ／＼激しくなり行き、諸物資の配給は更に貧しくなるかも知れぬ。しかし吾等が護る我國土の自然は昔ながらの日本の自然である。一日の労働を終へた夕べ、月は昔ながらにさやかに照り、燈火なき夜の空は一層の美しさを示すであらう。一日の労働は激しくとも夜は快く眠れ。睡り覺れば朝戸出の袂に風は涼しく、更に新しい一日の労働を勵ますであらう。斯くして吾々は一日々々を戦ふのであ

る。

麓に立つて望めば山頂は遙に遠い。しかし、一心不亂左右を顧みずたゞ一步一步を踏み行くものは、實は意外に早く山頂に達してゐるのである。

(昭和十九年十月號「現代」所載)

武器としての藝能

新聞寫眞で見ると、爆撃により廢墟と化したベルリン市中を、昂然として軍樂隊が行進してゐる。これは吾々としても今考ふべき問題である。獨り音樂のみならず藝能一般の民心に及ぼす効果——民心を奮ひ立たせ、また悦び娛ませる効果といふことに就き爲政者は特に思ひを致すべきである。此處に決戦の有力なる一つの武器がある。

音樂舞踊演劇其他、すべて藝能の美の喚び起こす感動は他に比すべきものがない。心身ともに純化せられ、命も物も惜しからず、君國のためには如何なる

ことか爲さざらんと思ふ氣持ちを湧き起こらせることに於て、演説も文章も遠く及ばぬことは既に體驗者のよく知るところである。

たゞ何處までも大切なのは眞に修行練磨せられた本統の技藝の力といふものである。故に假りに主旨や文言などが時局的であつても、作品演技其物が藝術として低くければ決して好結果は望まれぬ。此點當局者が功を淺近のところ之急ぎ、萬一にも附け焼刃的藝能品を求めぬやう、眞に藝術的によきものを獎勵するやう、特に意を用ゐられんことを望む。

これは藝能其自身のために言ふのではない、決戦のために言ふのである。決戦の武器の一としての藝能のために言ふのである。

(昭和十九年十月九日東京新聞所載)

對米放送に擬す (臺灣沖航空戦直後)

アメリカの男女諸君。

諸君、一寸話がある。

諸君はアメリカの第三八機動部隊が日本の沖繩及び臺灣を攻撃したことを知つてゐるだらう。これは諸君の政府の發表したところである。たしかにやつて來た。沖繩にも臺灣にも多數のアメリカ飛行機が來襲して爆彈、焼夷彈を投下した。そのため家が焼け、人が死に、家畜も死に、昆蟲も死んだ。これを戦果といへばたしかに君の方に戦果があつた。吾々は正にこれを認める。

對米放送に擬す

きいたいの、それから後三八機動部隊はどうなつたかといふことだ。諸君の政府は餘り發表しないやうだが、日本の大本營は數日來毎日明確な公報を出してゐる。日本の發表は信じられないといふなら、それでも好い。やがて真相は分るであらう。殊にそれは政府から艦隊乗組員の家庭への別々の通知として判明するであらう。その通知を受ける家族は相當の多數に上るであらう。それは家族同志互に聞き合せて見給へ。さうすれば分る筈だ。

幾人かの人、機動部隊の出港を見たであらう。また幾人かの人、同じ部隊の歸港をやがて見るであらう。その出入艦艇の隻數の差は多くの物語を物語るであらう。併し、出たきりで歸つて來ない艦艇も全く消滅してしまつたといふ譯ではない。何處かに居ることはたしかに居るのだ。但し水の上でなくて水の底で、地球に密着してゐるのが相當多いらしいのだ。

中には日本の船渠で修繕されることになるのも或はあるかも知れないが、これは未だ分らない。何れにしてもこれ等の艦の乗員と諸君との連絡は絶えるであらう。それで真相を察し給へ。

これが戦争といふものだ。別に不思議はない。日本人が覺悟してゐるやうに、諸君も覺悟してゐるであらう。

たゞきいたいが、これだけの戦争を諸君は何の爲にやつてゐるのだ。何のために戦ふのか。ポオランダの獨立を扶けるためか。そのポオランダといふ國はどこへ行つた。大西洋憲章の主義を守るためか。その大西洋憲章はどうなつてしまつた。

そんなら支那のためだといふか。支那人と諸君と一體どんな間柄だつたのだ。支那人の入國を拒絶したのは何處の誰だつたのだ。今、支那の各地で支那住民に爆彈を投じてゐるのは何國の誰なのだ。諸君はデモクラシイのために戦ふといふ。重慶はデモクラシイか、諸君は人民に選舉された議會が重慶にあるとで

も思つてゐるのか。民選議會のないデモクラシーといふものがあると思つてゐるのか。そんな珍しいものを援けて見たければ見るのもよからう。艦隊や飛行機もみな君の國のものだから遠慮はいらない。どうとも自由に使ふがよい。沖繩や臺灣は動かずに元の處にゐるから、先日の旅行が面白かつたらまたやつて來給へ。そこには日本人が待つてゐるだらう。太平洋の魚も多分待つてゐるだらう。

(昭和十九年十月二十日讀賣新聞所載)

アジヤは青年に期待する

嘗て上海租界の公園の入口に立札があつて、支那人と犬と自轉車とは入るべからずと書いてあつた。

これは有名な話で、私も先年上海に行つたとき、たしかに自分の目で見たことがある。ロンドンの公園、ニューヨークの公園に、英國人又は米國人と犬とは入るべからずといふ立札が出たら、英人、米人は何と言ふであらう。然るに租界とはいひながら、立派な中國の領土の一部に英人、米人等が入り込んで來て公然こんな無禮な事を掲示して彼等自身は恬として怪まず、支那人自身も別

アジヤは青年に期待する

三五

段憤慨するでもなく、平氣で之を眺めてゐたとは、今になつて見れば、想像もし難いやうな奇怪極まる事實であるが、これが間違のない事實であつて、アジヤに於ける西洋人の横暴壓制は此の一事に由て見ることが出来る。しかしこれは上海ばかりの事ではない。ボンベイでもカルカッタでもコロンボでもランダウンでも元のシンガポールでもバタヴィヤでもスラバヤでも其他の各地でも、苟も西洋人が乗り込んで来て、アジヤ人と接觸するところでは、何處でも同様な壓制と掠奪と無禮とが行はれた。日本とても全く例外ではあり得なかつた。横濱や神戸や、其他日本國內の各地で西洋人と日本人と接觸するところでは、一時は、同様の光景を見ることが出来たものである。しかし、日本に於てはその期間が極く短く、西洋人との接觸が始まつてから、三、四十年の間に西洋人の治外法權を撤廢し、租界を廢止し、完全に西洋人の無禮を許さぬことになつた。さうして久しい間、日本はアジヤ全部を通じて西洋諸國の輕侮を受けぬ唯

一つの例外の國であつた。しかし、大東亞戰開戦以來、此の例外は通則となり、數百年以來アジヤは始めてアジヤ人のアジヤになり、アジヤ人はアジヤの主とならんとしつゝある。また是非ともさうしなければならぬのである。

しかし此處で吾々は考へなければならぬ。どうして日本だけが唯一つの例外として西洋人の壓制に對抗することが出来たであらうか。大東亞諸國の我友人諸君は、私の言ふことをどうか不遜とか自負とか思はずに聽いて貰ひたい。日本だけがアジヤに於ける唯一つの例外となつたことは争ひ難い事實である。

印度人諸君、ビルマ人諸君、フィリッピン人諸君、インドネシヤ人の諸君、さうして支那人の諸君、英・米・蘭諸國の人間が、過去に於て諸君の大切な國々を屬國とし、半屬國とし、或は植民地として政治上に壓制し、經濟上に搾取したことは、争ひ難き、紛れもない事實である。さうして此に對して日本がたゞ一つの例外であつたことも間違ひのない事實である。どうしてさうなつたか。

私は遠慮なくいふが、矢張り日本人が一番勉強したからだと思ふ。殊に科學を勉強したからだと思ふ。印度の哲學や支那の儒教や文學は、世界中何處へ出しても恥しくないものであらう。しかしそれだけで國を護ることが出来なかつたことも確かである。然るに最も早く科學を勉強して我物にした日本だけが、前記のやうな例外國となることが出来たとすれば、茲に諸君の考へなければならぬ問題があると思ふ。

勿論一國の盛衰には様々の原因があるから、近世に於ける日本の勃興を科學の發達たゞ一つに歸するのは、多分完全な説明にはならぬであらう。けれども其の最も大切な一原因が科學の發達であつたことは争ひ難いと思ふ。西洋人のアジアに於ける横暴は憎みても尙ほ餘りある次第であるが、これはたゞ憎惡するとか、憤慨するとかいふ丈けでは、彼等を抑へ付けることは出来ない。どうしても吾々に其實力がなければならぬ。その實力の大切なる一つの基礎は科學

であり、同時にアジア全體の實情と西洋に對抗するために如何に相協力し、如何に長短相補はなければならぬかを科學的に認識することが最も大切である。久しく西洋人がアジアで横暴を働いたのも一つには彼等に科學といふ武器があつたからである。吾々は敵の武器を奪つて敵を倒さなければならぬ、さうして其が決して不可能でないことは、不遜のやうだが日本の實例に依て諸君はよくお認めになると思ふ。

戦争になると人はとかく學問を忘れ勝ちである。しかし今度の戦争の勝利をたゞ一時の勝利に終らしめず、永久にアジア人をアジアの主となさしめるためには、先づ基礎を堅めてかゝらねばならぬ。それは學問であり、教育である。さうしてそれは青年の任務である。アジアの壯年或は老人の中には嘗て米英人の抑壓の下に首を垂れたものもあるであらう。しかし新しい日の曉はすでに明けた。アジアの青年の目標はたゞ一つである。アジアの自立の爲め、自らアジ

ヤの主となる爲めに學ぶといふことがそれではなくてはならぬ。

蒋介石政權が過去十數年、教育に力を入れて來たのは私も認める。誠に感心だと思ふ。たゞ吾々アジャ人の勉強は西洋に對してアジャを護る爲めの勉強でなければならぬ。一生懸命に勉強して米英の門衛を勤めるといふのは何といふ見當外れの物好きであらう。嘗て久しく日本がたゞ一つの例外として西洋諸國の壓制に對抗したやうに、重慶政權は精々教育を奨勵して、米英資本家、米英寡頭政治家の手先を勤め、全アジャ中たゞ一つの例外として全アジャ民衆に對立したいといふのが素願であるか。哲學者であり、愛國者であり、支那國民の師であり、父である孫中山先生これを見て果して何と言はれるか。重慶の青年諸君よく思ふべきは今である。

〔NIPPON〕三六號に英譯發表の原文〕

(昭和十九年十二月以印刷代贈寫)